

Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第24巻第5号 (2016年12月15日)

10回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。HPの更新もぼちぼちですが取り組んでいます。

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください。

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール sakatake2000@yahoo.co.jp

購読料 無料 (カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会

他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

24巻第5号 目次

まえがき

トランプ登場の背景を論ず(『情況』3号寄稿文)

フレデリック・ロルドン宛手紙

アメリカ資本主義論の解明のために

I. ルネサンス研究所関西11月定例研究会

『情況』2号「世界経済特集」合評会報告

II. ヒルファーディングの誤りについての詮索

(興味のない方はスルーされたい)

まえがき

今回のトランプ論は、アメリカ資本主義論ですが、これはもともと『情況』2号用に準備していたノートの要約です。『情況』編集部から寄稿の依頼があり、急遽まとめてみました。本誌次号では、仕上げたいと考えています。今号で要約したものを完成させたかったのですが、無理でした。しかし、半年くらい温めたので、読み応えのあるものにしたいと考えています。

いろいろなトランプ論が出ていますが、階級闘争の目標を設定し、新たな戦術を提起できるような議論は少ないと感じています。何よりも敵の実体を明らかにする必要があり、高利資本のヘゲモニーという問題提起をしてみました。ここからどのような実践的結論が出てくるか、利子生み資本のカタストロフとセットで、ルネサンス研究所関西での研究課題として議論を始めます。

あと、アメリカについて特に詳しく研究したことはないのですが、直感的に、マッカーシズムによって崩壊させられた共産主義運動の復活を予感しています。もちろん20世紀の共産主義ではなく、リニューアルされたそれです。そしてフランスの階級闘争は、また独特の展開を見せていますが、世界の階級闘争の機関車として期待できそうです。

たまたま、次回のルネサンス研究所定例研究会が、ロルドン著『私たちの感情と欲望は、いかに資本主義に偽造されているか？』（作品社）の批評会を、訳者の杉村昌昭をお招きして実施しますので、この本を読んでみました。前作の『なぜ私たちは喜んで資本主義の奴隷になるのか』（作品社）を読んだときにも感じていたのですが、どうも的を外しているという印象を免れえません。そしてむらむらと感想を書きたくなり、手紙の形で書いてみました。英訳してロルドンに届けてもらう予定です。そして手紙を書いてみて気づいたのですが、物象化を意志支配と捉える見地から、アメリカ、フランス、そして中国の論客たちと議論できるような場を作りたいと考えるようになりました。

もともとルネサンス研究所は、ヨーロッパでバディウたちが始めた共産主義の大討論会に刺激されて、国際的なイベントを企画することを目標としていました。これはまだ実現されていませんが、まずは意見交換の試みから始めてみたいのです。ホロウェイへの手紙は書いたまま英訳はしていませんでしたが、これも訳したり、また、ラッツァラートにも手紙を書きたいです。そしてグレーバの『負債論』の紹介を見ていると、貨幣論で、アグリエッタ・オレルアンの『貨幣主権論』に依拠していることがわかりました。それでこの書への批判もやってみたいです。ひと月早い初夢ですが、何とか実現したいです。

さて、ルネサンス研究所で2016年調査研究プロジェクトを提案して以降、『情況』誌2号に、共同研究という形で4人のメンバーの寄稿を実現しました。内実は共同研究として取り組めたわけではないのですが、これを機会に合評会をやり、研究所らしい議論ができました。その合評会の報告を掲載します。今回の共同研究で驚いたのはヒルファーディング評価で大きな相違があったことです。私は『金融資本論』の内容を基本的に否定したところにアメリカ資本主義論を構築しようという呼びかけをしたのですが、それは実現できませんでした。それで急遽ヒルファーディング批判を綴ってみました。これは文字通り詮索で、興味のない方はスルーしてください。

トランプ登場の背景を論ず（『情況』3号寄稿文）

榎原 均（ルネサンス研究所関西運営委員）

はじめに

トランプ当選後も「トランプを認めない」デモが各地で繰り広げられた。予備選からのトランプのヘイトクライムに、当事者たちは恐れを抱き運動に乗り出している。またトランプが勝利した三州での再集計の動きもあり、トランプがどうなるか予断は許さない。私はアメリカ社会の事情に詳しくはないが、この間ウォール街・財務省複合体がおし進めてきたグローバル資本市場の問題点の解明に努力し、一定の結論を導き出している。その見地からトランプ登場の背景について考察してみたい。

まず、資本の蓄積、つまりお金が増えていく経済過程で、人が観察できる経済的外観は、その中身を隠す幻影的形態であるという考え方を受け入れてほしい。新自由主義の経済学説は、まさにこの外観が幻影的形態ではなく真実であるという前提で、労働者も労働力を所有している資本家で、「人的資本」として投資の対象であり、また、生産活動ではなくお金にお金を産ませる投資こそが資本主義の大道であり、株式会社も株主が所有者で、配当こそが命であると主張してきた。

確かに、資本（お金）—利子、労働—賃金、土地—地代、という外観は、労働もお金や土地と同様の資産である、という考え方を導くことができる。しかし、ハーヴェイが『新自由主義』（作品社）で明らかにしているように、新自由主義は支配階級の一部による新たな階級闘争の展開であり、戦後の労使妥協的なフォードイズムの体制において、労働に配慮してきた分配率を引き下げ、社会保障を切り縮めて一部資本家階級の取り分を増大させることを目的としていた。新自由主義は長期の階級闘争の結果、一九八一年に共和党のレーガンを大統領につけた。レーガンは、先の経済的外観から自由競争に最大限の価値を認め、小さな国家をスローガンに、規制緩和と民営化を推し進め、抵抗する労働組合の骨抜きを行った。政権交代し、民主党のクリントンになっても、新自由主義は継続され、むしろグローバル資本市場の形成という点からみれば、後述するようにクリントン政権時代がポイントになっている。

人が観察できる経済的外観が幻影的形態であるとしても、資本蓄積の結果生み出される社会現象は幻影的形態ではない。ピケティは『21世紀の資本』（みすず書房）で、資本の蓄積運動そのものの解明ではなく、税の資料にもとづいて、それが生み出す社会現象である富の富裕層への集中が、新自由主義導入後に一層進められていることを証明して、当の新自由主義者たちすらも驚愕させた。またリーマンショックの後、二〇一一年になされたオキュパイウォールストリートのスローガンは％対九九％であった。社会現象は幻影的形態ではなく現実そのものを示している。これを感性的に実感した人々は闘争に立ち上がり、運動を進めている。しかしこの新しい運動が実を結ぶためには、経済過程の外観が幻影的形態であり、その本当の現象形態の内実を知ることによって敵の存在を明確化し、闘争の戦術を解明しなければならない。（なお、この文章は、準備中の論文を急遽要約したものである。）

グローバル資本市場の形成過程

一九七一年のニクソンショック（金・ドル交換停止）とその後の外国為替の固定相場制から変動相場制への移行はグローバルな資本移動を促進し、しかも為替相場の変動のリスク解消をめざす投機取引を増大させることになった。外国為替取引において、貿易実需を遥かに凌駕する投機取引がなされるようになったのである。九〇年代初頭には、国内のバブル景気を背景に日本の銀行が世界の銀行トップテンに最大八行も入っていたが、その頃の日本の大銀行は、預金を貸付けて利鞘をとる通常の業務よりも、デーリングルームでの外国為替の投機的な外貨取引での利益が多くなっていたのだ（浜田康行・沢田隆著『邦銀ロンドン支店』、東洋経済）。

しかし外国為替市場における投機取引の拡大による資本の蓄積は、その後のグローバル資本市場形成の序曲にすぎなかった。多国籍企業の発達と多国籍銀行の形成をその土台として、グローバルな資本移動が本格化していったのである。その第一歩は変動相場移行と同時期に起きたユーロダラー市場の拡大であった。ユーロダラーの始まりは東欧諸国が貿易で獲得したドル資産をアメリカの銀行に預金することをためらい、ロンドンの銀行にドル預金したことに始まる。石油ショックのときからの原油の値上がりで産油国は膨大なドル資産を獲得したが、OPEC 諸国はロンドンの銀行（アメリカ銀行支店を含む）にドル預金をし、これが銀行間で運用され、ユーロダラーはインターバンク市場として拡大していった。アメリカの多国籍銀行は、もともとはアメリカの多国籍企業のための資金調達の必要性から他国での支店展開を始めていたが、ロンドン支店ではドル預金を受け入れて、余剰ドルがアメリカの外部で、アメリカの銀行規制の枠外で銀行間のコールローン（短期の資金のやり取り）市場として機能し始めたのである。七〇年代末にはアメリカ国内のインターバンク市場を凌駕するまでに成長していた。

ユーロダラー市場は、それに参加している多国籍銀行にとっては、低利で大量の資金を手当てできるお宝箱であった。もともと短期の資金のやり取りが中心であったが、そのうちに長期の貸付を短期的融資の更新として実行するシンジケートローンの技術を開発し、余剰ドルを低開発国に貸し付けた。

しかし、低開発国への銀行による融資は、多国籍企業や、現地企業の設立などのばあいのような、貨幣を資本として貸し付ける近代的利子生み資本の運動ではなく、封建時代に王侯貴族に貸し付けた高利資本と同じであった。シンジケートローンによる低開発国への貸付は、貸付けた貨幣が企業に投資されて資本として機能するケースはまれで、国の貿易赤字の手当てや、政治家の着服などで消えてしまい、債務返済不履行に陥ったのだ。

スペースの問題もあり、一九八二年のメキシコの累積債務危機などについて詳しく述べることはできないが、高利資本的貸付けも、資本家的企業への貸付も、その外観は G・・・G、つまり貸したお金が利子をともなって返済される、という点では見分けがつかない。だから肝心なことは、実際の貸付の中身が精査され、貸付けた貨幣が資本として機能しているか、単に貿易赤字の解消や、着服などで浪費されてしまったかどうかの見極めが大事なのである。

転機としてのブレイディ新債務戦略（一九八九年）

累積債務問題によってアメリカの多国籍銀行は巨額の不良債権を背負うことになった。これをどうするか、長期にわたる様々な交渉の結果、ついには債務の証券化の技術が開発され、そのためのグローバルな資本市場の拡大と成長が始まった。

毛利良一『グローバリゼーションと IMF・世界銀行』（大月書店）によれば、アメリカ多国籍銀行の焦げ付いた債権回収は、債務の証券化であり次のような仕組みであった。

「①債務国は、IMF・世銀の中期経済計画に沿って、海外逃避資本の還流、債務の株式化や国営企業の民営化などを通じる資本流入の促進、国内貯蓄の増強を図る政策を採用する。

②民間銀行は、リスケジュール、当面の利払いのための新規融資に加えて、新たに債務削減（債務残高の削減、利払いの軽減）に応じる。

③IMF・世銀は、救済融資の一部を、債務買い戻しのための資金融資、債務の債券化にともなう債券（のちにブレイディ債券と呼ばれる）の元本・利子の担保保障など、債務削減に振り向ける。

④債務削減の障害となるような銀行監督規制、会計基準、税制面での制約などを除去、軽減する。」（毛利、一四〇頁）

ここでのミソは、IMF が債務国に対して、資本の自由化を迫っている点である。これによって、債務国は資本の自由化を強制されてグローバル資本市場に組み込まれ、アメリカからの資本投資が増加し、エマージング市場としてその成長が期待されるようになった。

エマージング市場の発達と米国の対外経済政策の転換

こうして新たに形成されたエマージング市場には、多国籍銀行だけでなく、ヘッジファンドなどが新たに取引主体として登場し、外国為替市場にもヘッジファンドが登場するようになった。外国からの商品輸入の増大によるアメリカの経常収支赤字の拡大を、国債や株式の外国への売却による資本流入でファイナンスする、国際マネーフローの「新帝国循環」が形成された。この動きはクリントン政権時代に、米国対外経済政策の重点を通商から金融にシフトすることで加速された。指揮したのはルービン財務長官とグリーンズパンFRB議長であり、外資流入によりニューヨーク株式市場ダウ平均が、三七九〇ドル（一九九四年）から七四〇〇ドル（九七年）をへて、一万ドル（九九年）になった。米銀や投資ファンドは、そこで得た利益の一部をエマージング市場に還流して「新帝国循環」を形成した。「ウォール街・財務省複合体」の成立である。

しかしこの新たなグローバル資本市場の展開は、累積債務危機に代わって、通貨危機を連続することになった。メキシコ通貨危機（一九九四年）、九七～八年のアジア通貨危機は、ロシア、ブラジルに波及した。毛利によれば、これは短期証券依存型危機で、原因は債務の株式化とブレイディ債務削減戦略にあった。「銀行債務が株式に転換され、これが米国株式市場で預託証券として取引が拡大し、一般投資家や年金基金などの機関投資家の投資対象に成長してきたのである。」（毛利、一五九頁）

これらの通貨危機は、危機に見舞われた諸国の経済を破壊しただけでなく政権にも打撃を与えたが、短期資本を引き揚げた側にも損失はあったとはいえ、ウォール街は無傷であった。

投資銀行ビジネスモデル

この時代のアメリカの対外経済政策でもてはやされたのが「投資銀行ビジネスモデル」だった。『マネー資本主義』（NHK出版）はリーマンショックの後、当事者に取材して放映されたドキュメントの書籍化であるが、投資銀行の当事者の証言に注目しよう。

投資銀行は、それまで「顧客をよく知るべし」をモットーに、社会のわき役に徹していたが、ソロモン・ブラザースが一九七八年に開発したモーゲージ債の急成長がその変貌の転機となった。これは、連邦政府抵当金庫（ジニーメイ）などが発行していた不動産ローン債券を買い集めて新たな債券として一般に売り出すビジネスでこれが急成長したのだ。

「ちょうど、年金基金などの運用が自由化され始めていた時期であり、この商品は大きな注目を集めた。貸し手はローンを転売することによって負担から逃れられるため、その分を新しい融資にまわせる。……運もソロモンに味方した。一九七九年のいわゆる『ボルカーショック』で金利が高騰し、S&L（貯蓄貸付組合）の倒産が相次ぐなど、住宅資金貸付の仕組みが大きな打撃を受けた。二年後、今度は租税特別措置法により、S&Lの経営の自由度が高まり、大量の住宅ローンが市場に放出された。ソロモンはそれを買いきり、売りまくった。」（『マネー資本主義』、一九頁）

これはリーマンショックを招いたサブプライムローンの先駆けである。「ローンや債券などの『借用書』を材料とし、トレーダーがこれを自分で集め、『債券』という新しい商品に作り替えてまた売り出すことがソロモンの開発したビジネスだった」（同書、二八頁）

投資銀行ビジネスはアメリカの中心産業となり、ITによって世界に急拡大していく。モーゲージの債券市場は利益が出にくくなったが、「今度は株式や為替、新型の債券市場（デリバティブ商品市場）が沸騰しようとしていた。」（同書、二九頁）

他方でルービン率いるゴールドマンサックスは「世界規模の『自己勘定』ビジネスを展開、ベセラ氏率いる舞台は海外の債券を使った大胆な取引で巨額の利益を上げていった。」（同書、二九頁）のちに財務長官となったルービンはこの投資銀行ビジネスモデルを従来通商政策に代わるアメリカの対外経済政策に据えたのだった。

「ゴールドマンは周到な情報収集によって、新興国の市場開放のタイミングをいち早く

見定め、現地に確固たる足場を築いていった。そして、その国の債券を材料に新しい債券をつくりだし、先進国に売りさばくことで、世界の投資トレンドをつくっていったのだ。」（同書、三〇頁）

投資銀行は、パートナーシップから株式会社へ変更され、四半期ごとの業績が求められるようになり、業績に追われてより多くの商品を売らなければならなくなった。IT 技術の発達もあり、貸借対照表も変化し、国債や一般株から、新規で流動性もない評価も難しい商品に中身が変わった。

八〇年代から九〇年代にかけての投資銀行の変質はこのようなものであった。まとめれば、八〇年代は後の金融危機につながる商品開発や投資銀行のスタイルを形成した。九〇年代は投資銀行が凄まじいまでの収益競争とその IT 化、世界化が急速に進展するという点において後の金融危機につながる環境を形成するのである。

負債資本の支配による負債経済の成立

リーマンショック以降の分析にさく紙幅はない。結論を急ごう。問題は暗号化している信用制度の外観の謎解きである。G・・・・G'、という外観をもって展開されているグローバル資本市場の内実を暴露することだ。

現在グローバル資本市場では、高利資本を根に持つ負債が証券化され、公社債市場で売買されている。近代的利子生み資本は、貸付けた貨幣が、機能資本家のもとで資本として機能することを原理としている。そして資本所有の社会化が進み、近代的利子生み資本の派生的形態として、株式や社債などの擬制資本が増大し、これらは取引所での利子生み資本の投下対象として、投機の間を形成している。グローバル資本市場は、この利子生み資本の投下対象に、国債や消費者金融を根に持つ証券などの高利資本を参入させた。低開発国への貸付に始まり、外国為替取引におけるデリバティブ取引、そして極めつけはソロモンが一九七八年に開発したモーゲージ債の証券化であった。

高利資本の種類には、国債のほかには、住宅ローン、自動車ローン、カードローンなどの消費者の各種の負債があり、これらの証券化によって、アメリカの株式市場のみならず、公社債市場もグローバル資本市場として成長したのであった。

マルクスは他人の資本で投機をする資本を信用資本と名付けた。私もそれにならって、現在の資本主義を信用資本主義として規定してきた（拙著『「資本論」の核心』、情況新書）。しかし、ラッツァラートの負債経済論の提起（『情況』二号榎原論文参照）を受けて、信用資本主義論の修正の必要性を感じている。高利資本は国や消費者の負債を実体としている。であるならば現在の高利資本のヘゲモニーは他人の負債による投機として存在している。これは端的にいうと負債資本による負債経済の成長である。現在のグローバル資本市場はハイジャックされた航空機のように負債資本に乗っ取られている。負債経済は、負債者の債務不履行によって絶えず崩壊のリスクにさらされている。そしてその崩壊はリーマンショックにみられるように債務者からの取り立て、住居からの追い出しであり、各種の金融仲介業の破綻である。これは従来の銀行恐慌や産業恐慌とは異なる種類の社会の破壊であり、それを食い止めるべく、各国中央銀行はマイナス金利の採用を余儀なくされている。資本の所有にマイナスの利子をつける、ということは資本主義の否定である。資本主義の総本山である中央銀行が資本主義を否定する政策を実行している。これはまさに、利子生み資本のカタストロフ（破局）にほかならない。

顧みれば負債経済の端緒は、クリントン時代の対外経済施策の転換にあった。クリントン政権は、アメリカ国民経済とグローバル資本市場としてのウォール街とを天秤にかけウォール街の発展に賭けたのだ。その結果、グローバル資本市場での高利資本のヘゲモニーを貫徹させることになり、利子生み資本の破局を招き寄せた。負債資本を一掃すること、これがアメリカ大衆の感性的に分有する共通課題となり、保守も労働者もワーキングプアも学生もこれを求め、トランプとサンダースを押し出した。ヒラリーはクリントン政権時代のファーストレディーだった。大衆は感性的なレベルでクリントン政権の政策転換を受

け止め、ヒラリーを嫌ったのだ。以上がトランプ勝利の背景である。

フレデリック・ロルドン宛手紙

(解題)

ルネサンス研究所関西、12月定例研究会で、訳者の杉村昌昭さんをお招きして、ロルドンの著書『私たちの感情と欲望は、いかに資本主義によって偽造されているか?』(作品社)の批評会を企画しました。それでこの本を読んでみたのですが、久しぶりに情動がウズウズと沸き上がり、手紙を書きたくなりました。

フレデリック・ロルドン様

私は『既成概念をぶち壊せ!』(晃陽書房)の編集で、杉村昌昭さんと一緒に仕事をしたご縁で、彼から、あなたの人となりや新著については翻訳中から聞かされておりました。このたび、訳本が出版されたので、ルネサンス研究所関西の定例研究会で杉村さんをお招きして、あなたの新著についての批評会を企画しています。それで、今訳本を読んでいる最中なのですが、どうしてもあなた宛てに私の意見を届けたくなり、失礼を顧みず、手紙をしたためています。

あなたはスピノザの感情論に依拠して、今日の不妊な社会科学の限界を突破しようとしており、それ自体に異議を申し立てるわけではありません。しかし、あなたが取り上げている経済的制度は中心的には賃金制度であって、商品や貨幣そのものの検討には至っていません。これが実は私の不満であり、「人間は様態である。すなわち『他のものの内にあり、かつ他のものによって構想されるものである。』」(訳書、230頁)という卓越したスピノザの視点を、私は賃金制度だけでなく、人間を商品制度や貨幣制度の内にあるものとして分析したいと考えています。杉村さんはあなたの前の本のタイトルを訳書では意識して『なぜ私たちは、喜んで資本主義の奴隷になるのか?』としましたが、これは私がずっと追及してきたテーマであり、現在は、私は私なりの理解を確立しています。私はこのテーマを、商品からの貨幣の生成を論じることで解明したのですが、これをあなたに伝えたいのです。

問題は『資本論』の商品章、貨幣章の新たな視点からの解説ということになります。日本では、『資本論』について、大学教授たちが多くの論争を繰り広げてきた歴史があります。特に商品、貨幣章と、第三巻の信用制度については、本当に微にいり細を穿って議論されました。おかげで学会とは無縁な私のような活動家にも資本論研究の場が開かれていたのです。フランスでの論争は、アルチュセールの編集した『資本論を読む』が翻訳されていますが、それ以外の論争はほとんど翻訳されておらず、どのようだったかは知る由もないのですが、私の商品からの貨幣の生成論は日本での論争の成果で、これまでの私の見解も学説批判の形で書いてきました。いまそれを論争の埒外にある外国人のあなたに向けて書くことで、自身の見解の研鑽になることを期待しつつ筆を執っています。

結論から先に述べましょう。商品からの貨幣生成の原理は、『資本論』現行版では解明できず、『初版資本論』の価値形態論の研究が不可欠です。そしてそれに依拠すれば、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によることが判明するのです。つまり商品所有者たちは商品に自らの意志を宿し、商品の概念を実現するのですが、そのことで商品に意志を支配されてしまうのです。この意志支配こそ、マルクスが *Versachlichung* (物象化) と呼んだ事態だ、というのが私の見解です。その際にマルクスが使っている、*Ding* (物) 及び *Verdinglichung* (物化) と、*Sache* (物象) 及び *Versachlichung*

(物象化)の区別が重要になるのですが、二つの訳語が日本では共産党系の出版社の『資本論』訳本では区別されておらず、それがもとでの解釈上の悲喜劇がありました。しかもルカーチは Verdinglichung (物化)について論じているのに、これを訳者が物象化と誤訳したことで、日本の研究者たちは議論の土台そのものを見失ってしまっています。つまり、Verdinglichung (物化)の内容が Versachlichung (物象化)の内容と混同されてしまい、その結果 Versachlichung (物象化)ということの理解が確立されていないのです。

簡単な価値形態

ではさっそく、『初版資本論』に則して私の理解の根拠を示すことにしましょう。商品の価値形態とは、二つの商品の関係ですが、関係を把握する論理学はヘーゲルにあっても未開発です。マルクスは簡単な価値形態の分析で、関係を把握する論理を展開していますが、問題は価値の現象形態が感覚ではとらえられず、超感性的なものであるというところにあります。価値の現象形態それ自体は人間の感覚ではとらえられません。逆にいえば人間が感覚によってとらえられる価値形態は、超感性的な現象形態が人間の感覚に与える幻影的形態であり、それ自体は現象形態の正体を覆い隠すものだけということになります。

X 量の A 商品=Y 量の B 商品 この簡単な価値形態において、X 量の A 商品の価値が、Y 量の B 商品の価値に等しい、というように人々は理解するのですが、価値の現象形態はそのような常識的理解の彼方にあります。なぜ異なる使用価値をもつ商品の価値が等しいという関係がどのようにしてつくりだされているのでしょうか。常識的理解はこのことについて一切思考することを断念しています。ここでの問題は、異なる使用価値が価値という等しいものを表示しているのですが、その表示のメカニズムを解き明かすことです。X 量の A 商品が Y 量の B 商品と価値が等しい、という人間の把握とは異なって、X 量の A 商品が Y 量の B 商品と等しくあるためには、B 商品の使用価値自体が A 商品の価値の表示者である、という関係をつくりださなければならぬでしょう。そうすると、この関係のなかでは、B 商品の使用価値が A 商品にとっては価値以外の何ものでもない見なされていることになります。このことは同時に、A 商品も価値以外の何ものでもない B 商品の使用価値と同等なもの、つまりは価値であるということを表示することになります。

この関係(簡単な価値形態)では、このような回り道によって、A 商品の使用価値も B 商品の使用価値も、同じ価値として現象するのです。この現象においては、使用価値が捨象されており、異種労働の抽象的人間労働への還元がおこなわれていて、これはある種の抽象作用です。人間の思考の論理の場合、抽象は分析的にしかなされません。それとは異なって、二つの商品の価値関係にあっては、双方が関係することで抽象がなされます。これは事態抽象と呼ばれていますが、これが思考の論理による抽象作用とは異なるものなので、思考の論理的理解の彼方にあります。思考の論理的理解の彼方にある抽象作用についてはそれとして了解する以外にありません。人間以外の外の主体である商品価値の存在の仕方についての了解が、ここでは求められているのです。

二つの商品の価値関係において、価値がどのように現象しているかについてこのように読み解くことで、一つの形而上学的・神学的事態に直面します。それは、この関係においては、B 商品の使用価値が価値の化身とされていることです。この事態にマルクスは形態規定と名付けました。関係において、一方の極が、他方の極からの働きかけによって、自然的形態とは別の社会的質を与えられること、価値関係の場合は、使用価値という商品の自然的形態が価値という社会的なもの化身とされているのです。これがマルクスが明らかにした価値形態の秘密です。私見によれば、これが物象化の原理をなしています。しかし、人びとの感覚には自然的形態は把握できても社会的なものは把握できません。こうして自然的なものが生まれながらに価値の化身という属性をもっているかのような幻影的形態が生み出されます。これが物神性の原理です。

価値形態の発展

『資本論』現行版の価値形態論は、価値形態の発展のところでも初版の内容は大幅に書き換えられています。とくに第Ⅳ形態が全く異なるのです。現行版では第Ⅳ形態は貨幣形態ですが、初版では次のような、貨幣生成不能な形態となっているのです。

初版第Ⅳ形態

20 エレルのリンネル	= 1 枚の上着
	= 10 ポンドの茶
	= 4 ポンドのコーヒー
	=
1 着の上着	= 20 エレルのリンネル
	= 10 ポンドの茶
	= 4 ポンドのコーヒー
	=
10 ポンドの茶	= 20 エレルのリンネル
	= 1 枚の上着

現行版では次に示す第Ⅲ形態の等価商品が、特定の商品に固定された形を第Ⅳ形態とし、それが貨幣形態として説かれています。

第Ⅲ形態

1 着の上着	=	
10 ポンドの茶	=	
4 ポンドコーヒー	=	20 エレルのリンネル
.	=	

初版では価値形態論においては貨幣形態を導きださずに、むしろ貨幣形態不能な形態を第Ⅳ形態としています。そして、次の商品の交換過程で、貨幣生成を解いているのです。

商品の交換過程での貨幣生成論

『資本論』現行版では、貨幣の生成が、価値形態論と交換過程論の双方で解かれていて、日本ではこの二重の叙述をどのように解釈するかで論争がありました。しかし交換過程論は初版からほとんど変更されていませんから、叙述の一貫性という点で考察しようとするならば、初版に則して議論すべきでした。ところがこの論争でだれも初版を参照することはなかったのです。もし初版を取り上げていれば、忘れられてしまっていたマルクスの貨幣生成論の復元に至ったことでしょう。

初版の価値形態論では商品が主体とされ、商品が社会的に妥当な形態をどのようにして獲得するかという観点からの考察でした。ところが商品だけではこの概念は示せたものの（第Ⅲ形態）、その形態自体は作り出せないという結論を、マックスは、初版第Ⅳ形態で示したのでした。そして商品所有者が登場する商品の交換過程において、商品所有者が商品に自らの意志を宿すことで商品の概念を実現し、そのことで貨幣が生成されるという独特の貨幣生成論の解明に成功したのです。こうして商品からの貨幣生成は、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によることが明らかにされました。ここで本能という言葉の意味はもともと人間にそなわっている本能という意味ではなくて、商品に指示された社会的行為をあたかも本来の人間の本能的行為であるかのごとく錯覚して行動することを指しています。

先に価値形態の秘密が物象化の原理であることを指摘しましたが、貨幣生成をこのよう

に捉えれば、ここでは商品による人格に対する意志支配が成立しており、物象化とは実は商品という物象による人格の意志支配であるという結論がえられます。

そこで二つの問題がでてきます。一つはなぜ人は商品に意志を宿せるのか、ということであり、もう一つは、何故商品に意志を宿すことが自由と観念されるのか、ということです。一つ目にかんしては、商品は人間の労働の産物ですが、私的所有と分業のもとではそれは交換によってしか社会性をもてません。この社会性が価値ですが、商品の価値形態は人間にとってはある種の象形文字であり、異種労働の生産物を共通な社会的労働に抽象し、そして判断を示しています。人間の思考も対象を抽象して判断を下し言語で表現するのですが、商品も、その抽象の仕方は思考と異なる事態抽象ですが、X 量の商品 A がいくらの価値をもつかということをも B 商品との比較で判断し、Y 量という結論を導いているのです。人間は商品の「思考方法」は理解できませんが、象形文字で示されている判断だけは理解できます。商品の価値形態という象形文字の解読はできませんが、それが示す判断だけは理解できるのです。つまり商品は思考と同様の概念的な存在であり、人間は安んじてこの物象に意志を宿せるのです。

では二つ目に移りましょう。商品は価値としては社会的なものですが、使用価値としては自然物です。価値形態自体は超感性的ですから、それは把握できず、人間にとって把握できるのは使用価値としての商品であり、これは単なる自然物です。ですから価値の法則は人間にとっては自然物が持つ法則として捉えられます。自由と隷属の感情は、人間相互の関係において意識されるものであり、自然法則にあっては法則性の解明によってそれを利用することが自由と観念されます。つまり自然法則への順応が自由と観念されるのです。商品は人格の遺志を支配する物象ですが、人間は物象の社会的力を自然力としてしか認識できませんから、商品による人格の意志支配は、自然法則への順応と同等なものとして認識され、こうして、商品に意志を宿すことが自由意志の発動だと観念されるのです。

実際に商品市場に登場する商品所有者たちの意識を考察してみましょ。彼らは自分たちの商品に市場価格をつけて売ろうとしているのですが、この価格付けが、実は金を貨幣とする商品所有者たちの共同行為への参加なのです。彼らの価格付けという意志行為の裏面に共同行為による貨幣生成という事態があるのですが、しかしこの事態は決して彼らに意識はされません。したがって、彼らにとっては貨幣生成の行為は、無意識のうちでの本能的共同行為とならざるをえないのです。

賃金制度について一言

賃金制度について、あなたの理解は、マルクスは労働の疎外を強調したが、労働の解放的側面を重視はせず、しかしフォーディズムのもとでは労働の解放的側面を位置づける必要があるということのようです。しかし、フォーディズムは、発展途上国との関係で考察することが必要であり、発展途上国からの賃金の国際的な移転があつて、先進国の労働者階級全体が労働貴族化していたと見た方がいいかと思います。ところが新自由主義の登場と発展途上国への工場の移転とグローバルズムのもとでの労賃の国際的平準化、これが先進国での経済成長の停滞と、貧富の格差の拡大となっているのではないのでしょうか。新自由主義が労働者を労働力という資産の所有者とみなし、人的資本として位置づける試みは、賃金制度が生み出す幻影的形態に依拠したデマゴギーでしょう。このデマゴギーが支配力をもっているという現実、商品・貨幣による人格の意志支配にあるのではないのでしょうか。

自己紹介
(略)

アメリカ資本主義論の解明のために

I. ルネサンス研究所関西 11 月定例研究会 『情況』2号「世界経済特集」合評会報告

2016年11月26日 榎原

● 経過報告

1. 『情況』2号(8・9号)にルネ研メンバーで共同研究の形で4本の論文を寄稿した。榎論文、奥村論文、斉藤論文、榎原論文(掲載順)。なお、小林論文は榎原が寄稿をお願いした。
2. 最初の構想と草稿を見せ合いはしたが、斉藤論文を除いて会合で議論はできていない。
3. 出来ばえとしては、それぞれ面白い論文にできあがっている。アメリカの分析がテーマであるが、トランプ登場の背景の分析になっている。
4. 合評会ではそれぞれ自分以外の論文にコメントすることにした。
5. なお、小林論文は必読である。

● 榎論文について

1. いろいろ勉強になりました。私は利子生み資本のカタストロフに引きずられた資本のカタストロフという認識に到達したので、1929年恐慌に発する第二次世界大戦までの世界恐慌と長期不況も、カタストロフの観点から検討しようと考えている。その前の1873年からの大不況も視野に入れると、この大不況はイギリスのみで、ドイツやアメリカは重工業を発達させていた。この長期不況期にはドイツとアメリカ台頭があった。そして不況があげると、第一次世界大戦でヨーロッパは戦場となり、アメリカの一人勝ちに終わったが、そのアメリカ発の恐慌が世界恐慌になり、帝国主義列強による世界のブロック化、第二次世界大戦となる。そしてイギリスからアメリカへの覇権国の変遷が起きるのだが、他方で戦争中の総力戦体制がそのまま戦後の体制に引き継がれ、国家独占資本主義という見方が支配的になった。その際に金本位制からの離脱と管理通貨制への移行(国際信用制度における社会化)が要とされていた。この延長にIMFの成立を説く榎論文でのホワイト案とケインズ案の対抗の分析は面白い。そしてそのIMFの固定相場制が変動相場制に移行することを新自由主義の台頭からみている点も、斉藤論文と共通している。いずれにしても、1929年から始まる資本のカタストロフは戦争によって克服されたことに注目しておこう。

ただ、「埋め込まれた自由主義」とは総力戦体制とのからみで再検討する必要があるように思う。これがいったん新自由主義によって放棄された後、9.11以降ブッシュは対テロ戦争で総力戦体制をつくりだした。これがアメリカの覇権の衰弱につながっているが、リーマンショック以降、覇権国の交代というシナリオも見いだせず、カタストロフ状態にあるなかで敵を明らかにすることが大事である。

2. 敵の規定について、グローバル資本市場の成立が、自然発生的なものではないという指摘は重要である。貨幣や信用それ自体は別にして、信用制度は人為的構築物であり、その成立には政府や国家の役割が大きい。

3. グローバル資本市場に対する対抗運動の布陣を考える際に、グローバル資本市場それ自体が信用(負債)資本の蓄積の場としてあることを具体的にしめすことが課題であろう。これについては奥村論文へのコメントで触れる。

● 奥村論文について

1. 金融資本について

もともと末尾に資料として入れた私の4月10日のメモ(『ASSB』誌、24巻1号所収につき省略)では、金融資本に代わるものとして信用資本という範疇を提案していた。クレ

ジットキャピタルだがこれを訳すと信用資本となり、日本語の語感では良いもののように感じられて、この命名にこだわる訳ではない。意識して負債資本とか借金資本と名付けた方がいいかもしれない。

金融資本は『資本論』にはなく、金融という言葉も、稀にしか出てこない。だからその概念はヒルファーディングが規定したことになる。ヒルファーディングには、貨幣論での誤りがあり、マルクス主義の側からの金廃貨論の創始者であることはすでに指摘した。また次にのべるように、利子生み資本の原理的説明も欠落している。

2. ヒルファーディングの資本信用論

○ 商業信用（流通信用）から銀行信用（資本信用）へというヒルファーディングの提起は日本の信用論研究者の常識となったが、イギリスでは為替手形が中心だったという楊枝の異論がある。

「しかし、流通信用そのものによっては、一生産資本家から他の生産資本家への貨幣資本の移転も行われず、他の（非生産的）諸階級の貨幣が資本家階級に流入してこの階級によって資本に転化されるということも起こらない。かくて流通信用は現金に代位するという機能を果たすものとすれば、他方、貨幣がいかなる形態にあるかを問わず、従って現金であると信用貨幣であるとを問わず、これを遊休貨幣から機能貨幣資本に転化するという機能における信用を、我々は資本信用と名づける。これを資本信用と呼ぶのは、この移転は、常に、生産的資本の諸要素を買うことによって貨幣を貨幣資本として充用する人々への移転だからである。」（125～6頁）

○ 「資本信用」は単に貨幣の移転としてしか把握されていない。利子生み資本、資本の商品化のメカニズムの解明はない。機能的把握。

流通信用は貨幣が支払い手段としての機能を持つことから発生する「資本信用はそうではない。それは、ただ、所有者が資本として充用しえない一貨幣額の、これを資本として充用すべき誰かへの移転である。……したがって資本信用とは、移転によって遊休貨幣資本から機能資本に転化されるべき貨幣の移転である。資本信用は、支払信用のように流通費を節約するのではなく、同じ貨幣基盤の上で生産的資本の機能を拡張するのである。」（137頁）

「資本信用の可能性は、ここでは貨幣資本の流通の諸条件から生ずる。すなわち、資本の個別的循環において周期的に貨幣が遊休させられるということから生ずる。」（138頁）

○ 宇野理論の原型

「これまでに述べたところでは、銀行はまず第一に支払取引の媒介者として機能した。銀行は、諸支払の集中と地域的差異の調整とによって、支払取引を拡張する。次に銀行は、遊休貨幣資本の機能資本への転化を取計らった。銀行は貨幣資本を集め、集積し、分配し、かくすることによってこれを社会資本の循環に必要なそのつどの最小限に縮小した。

銀行はさらに第三の機能を引受ける、というのは、すべての他の階級の貨幣形態における収入を集めて、これを資本家階級に貨幣資本として用立てるのである。かくして資本家のもとには、銀行の管理する彼ら自身の貨幣資本のほか、すべての他の階級の遊休貨幣が流れてきて、生産的に使用されることになる。」（141頁）

「かような、商業信用からの銀行信用の相対的独立は、重要である。……信用の主要部分が商業信用で、銀行業者は主として手形商人であるにすぎなかったあいだは、そうではなかった。そこではむしろ銀行業者自身が事業の経過に、手形の支払いに、依存していた。」（146頁）

固定資本部分への貸付、長期の貸付「しかし、この種の信用供与が現われるとともに、産業に対する銀行の地位も変化する。」（150頁）

3. ヒルファーディングの資本信用論の誤り

近代的利子生み資本の原理は、貨幣資本家から機能資本家への貨幣の貸借である。これがはっきりしないと、 $G \cdots G'$ で表示される他の派生的利子生み資本や高利資本との区別がつかない。銀行による貸し付けにおいては資本はすでに架空資本化しているのであ

て、近代的利子生み資本の発展形態としてみる必要がある。株式や社債などの派生形態は擬制資本としてまとめられているが、さらには国債などの本来の高利資本も同じように扱われることで、それぞれの本質の違いが見逃されてしまう。

4. 上条の、「利子生み資本の最高形態としての金融資本」という規定の問題点

論文を送ってもらった時のコメントです。

「貴兄の金融資本論には全面的に異議があります。

上条の、「利子生み資本の最高の形態としての金融資本」という定義は間違いです。利子生み資本にいろいろな形態があり、低次から高次までであるというような考え方は、現実を知らない術学です。もしこれでいいというならいろいろな形態を数え上げてください。

たとえば、産業資本に最高の形態などありますか。資本の本質的規定は形態など問題にはしていない。いろいろな形態の本質的な内容を規定しているのです。

また資金の融通から信用を説くのは宇野理論です。

マルクスの利子生み資本論＝貨幣資本家と機能資本家との貨幣の貸借が否定されている。」

G・G' それ自体が形態であり、この形態を利子生み資本と名付けたのであるから、利子生み資本は形態への命名なのであり、そこにいろいろな形態を想定すること自体背理ではないか。むしろいろいろな種別があり、支配的なものを明らかにすることが大事ではないか。

4. グローバルな資本の蓄積様式について

いろいろ勉強になりました。アップルなどの産業資本のグローバルな蓄積を例に挙げ、グローバリゼーションの経済主体を、多国籍企業・グローバル企業と巨大金融機関としているが、グローバル資本市場の位置づけがない。グローバル資本市場は、変動相場制に移行して以降、新たに形成された市場であるが、負債資本主義にとっては、この市場自体が新たな資本蓄積の場としてあるのではないか。この場を金融市場と言うと語弊があるので、グローバル資本市場と呼んでいる。

5. アメリカ資本主義の特徴について

小林論文によれば、20世紀初頭までは投資銀行が企業の資金調達に大きな役割を果たした。世界恐慌とそれ以降に新自由主義が台頭する1970年代までは投資銀行は衰退していたが（埋め込まれた自由主義）、新自由主義とともに復活し、世界をかく乱することになる。その際アメリカの基準をグローバルスタンダードにしているので、その説明は20世紀初頭の独占資本形成におけるドイツとの相違、ひるがえって、ヒルファーディングの金融資本論とは別の分析が必要だろうというのが私見であった。上条に依拠してアメリカは分析出来ないのではないかと考えている。

6. 金融資本論の再検討（140頁のところ）について

ここは辛口の批判になります。

ヒルファーディングには近代的利子生み資本の原理が把握されていないので、銀行資本を高利資本と同一視している。株式発行業務によって発券し、それを売りさばいて出資金を集め、産業に出資することは、近代的利子生み資本の原理に基づくその社会化である。それは、貨幣資本家から機能資本家への貨幣の貸借ではなく、機能資本家への出資であり、資本の社会化であるので、出資者は配当を受け取る。この銀行による資本の出資を高利貸にアナロジーしているのがヒルファーディングである。

銀行家が大株主であることが想定されているのだろうが、株式で調達した貨幣は機能資本家に投資されていて、銀行の手元には株式証券（配当請求権）があるだけである。これは販売によって換金できるとはいえ、貨幣形態の資本ではあり得ない。

奥村論文は、「つまり擬制資本の形態で運動する利子生み資本を、金融資本といっているのだ」（141頁）と解釈しているが、しかし擬制資本は利子生み資本（マニドキャピタル）の投下対象ではあっても、それ自体が独自の運動をするわけではない。株価の上下は、マニドキャピタルによる株の売買の結果にすぎず、それが独自の運動をしているわけではない。

また株式を資本の二重化されたものと把握するのも誤りではないか。ヒルファーディングは組織された資本主義論にたどり着くが、それはこのような株式把握によるものではなかろうか。擬制資本は定期的収入を利子に見立てて資本還元して得られる架空資本のことだが、株式の場合はその実体は配当請求権であり、資本ではあり得ない。もっともフリードマンは株式を資本所有とみなしてはいるが。

7. 金融資本が高利資本化している？

現在のグローバル資本市場の略奪性は、金融資本によるというよりも、文字通り国債やカードローン、消費者金融などの高利資本が資本市場においてヘゲモニーを發揮している点に求めるべきである。その際に国際的な過剰資本がグローバル資本市場に引き寄せられている現実にもスを入れる必要がある。二重化した金融資本という枠組みは具体的分析をネグレクトすることにならないか。

● 齊藤論文について

1. 齊藤論文については草稿段階でいろいろ注文を付けたので、簡単にコメントするにとどめたい。まずはいろいろ勉強させてもらいました。

しかしグローバル資本市場ではなく、金融市場という古い概念を用いているところに疑問を感じます。

アメリカについては小林論文が投資銀行について歴史的実体的、かつ分かりやすい紹介をしてくれているので、それを研究してさらに金融商品批判を鋭くしてほしい。

Ⅱ. ヒルファーディングの誤りについての詮索 (興味のない方はスルーされたい)

職人技にめざめる

この間ルネサンス研究所関西で共同研究を提案し、『情況』への寄稿活動などを通してその成果を積み上げてきた。11月26日には『情況』金融特集の合評会をやったが、共同研究が一定程度可能となってきたことをふまえて、自分の役割について自覚することになった。私は『資本論』初版本価値形態論と、第3巻信用論のマルクスの草稿には通じていて、例えば、『資本論』第3巻現行版の利子生み資本論のところでは、エンゲルス編集の引用を読んだだけで、どうもマルクスの草稿とは違う、ということに気づくようになっていて、草稿を調べてやっぱりという職人技をものにしていく。

例えばハーヴェイが、『資本論第2巻第3巻入門』（作品社）で、第2巻を二つに分けて、その中に第3巻の第16章から第37章（商人資本と利子生み資本および信用制度）までを入れ込むという離れ業をしているが、この論拠について調べたことがあった。たまたま、張一兵氏を京都に招いたときに、張氏から、ハーヴェイを中国に招聘して講義をしてもらったという話を聞いたので、調べてあった情報を提供した。

「ハーヴェイの『資本論入門（第2巻・第3巻）』は、第2巻を二つに分割し、その真ん中に第3巻の商人資本と利子生み資本を入れるという独特の構成です。このようにすることが可能となったのも、ハーヴェイが、『第3巻では、利子生み資本の流通こそが、資本流通の物神的形態を完成させたものとして登場している。』（日本語版、235頁）というように、

利子生み資本を流通する資本として捉えていることによるでしょう。

実際に、ハーヴェイは、『資本論』第3巻から『貨幣を利子生み資本として価値増殖させようとする貨幣所有者は、それを第三者に譲り渡し、それを流通に投じ、資本として、すなわち自分にとってだけでなく他の者たちにとっての資本として、一個の商品にする。』（日本語版、248頁）という引用をして、『利子生み資本の流通』という自身の解釈の論拠としています。

確かに『資本論』現行版では『それを流通（Zirkulation）に投じ』（s.376）となっていますがマルクスの手稿ではここは、Circulation（MEGA4、s.416）であり、『循環に投じ』という意味です。また、現行版『資本論』第3巻のタイトルは、『資本制的生産の総過程』ですが、マルクスの手稿では『総過程の諸形象』です。ハーヴェイの第2巻への第3巻の組み入れという方法は、利子生み資本の分析をあいまいなものにしてしまっています。

つまりハーヴェイは『資本論』現行版にある「流通に投じ」とある個所に依拠したのだが、私はこれを怪しいとらんで、調べたところ、上記のように、「循環に投じ」をエンゲルスが「流通に投じ」に変更していたことが判明したのだ。ハーヴェイは利子生み資本も流通するものと捉えたがゆえに、資本の流通をあつかっている第2巻に割り込ませたのだが、それはエンゲルスの改竄に依拠したものだ。

ルネサンス研究所での研究プロジェクトをふりかえって

『情況』誌寄稿のプロジェクトで私が実現したかったことは、ヒルファーディングの金融資本論がアメリカの資本主義には当てはまらない、ということだった。20世紀初頭までのアメリカ資本主義は、独特の州ごとの小規模の銀行制度がつけられたことで、ヒルファーディングの銀行と産業との癒着という金融資本規定が妥当せず、ウォール街の資本市場を中心に投資銀行（銀行とよばれるが実際は証券会社）が独占の形成にヘゲモニーを発揮していた（『情況』2号小林襄治論文参照）。投資銀行は、世界恐慌以降、わき役になっていたが、レーガン政権が新自由主義的改革を導入して以降復活し、そして、投資銀行ビジネスモデルというアメリカのシステムがグローバルスタンダードにされている現在、ヒルファーディングに依拠していたのでは現在のグローバルな信用制度を分析しきれない。

しかし、この私の目的は実現されたとはいえ、ヒルファーディングへの依拠が続いている。確かに彼の著作は素晴らしい分析も含んでいて、『資本論』に次ぐ経済学書の古典であることは間違いない。しかし、基本的なところで誤りがあり、それを指摘しておくことが重要だと考え、他にいろいろやることも抱えているが敢えて、ヒルファーディングの批判に取り組むことにした。

ヒルファーディングの理論は日本の信用論学会の通説

例えば、飯田裕康著『信用論と擬制資本』（有斐閣）第4章 擬制資本論の基本問題、でヒルファーディングに依拠して次のように述べている。

「出資の証書、あるいは、配当請求権である擬制資本が、その現実の資本運動とはまったく異なる場において、一定の市場価格のもとで売買される。ここでの証券が独自の商品となるのは、現実資本と擬制資本とへの資本の二重化・分裂化をあくまで契機としている。」（飯田、124頁）

株式会社においては資本は二重化している、と見るのはヒルファーディングの主張だが、そしてこの見地から「資本の動化」という見方も生まれており、そして宇野弘蔵も株式は資本の商品化で、株式はそれ自身資本として機能しているとするのだが、これは後で検討するように間違っている。それはさておきここでは職人技を使う場面を示しておこう。続いて飯田は次のように述べている。

「擬制資本は、資本それ自体が商品化されることによって独自の運動・流通運動（G-A-G'）をなすのであって、この運動は、商品の姿態変換としての W-G-W とはまったく

ことなる。・・・かくて、証券に投げられる貨幣資本は、たんに証券売買のための追加的資金ではなく、利子生み資本たることを予定される可能的貨幣資本としてだということができる。したがって、形態的には売買としてあらわれるとはいえ、証券への投下は証券を媒介とした利子生み資本の貸出の形態として、逆に、証券の売却はその回収として把握されねばならない。」(飯田、125頁)

このくだりもヒルファーディングに依拠したものだ。飯田は『資本論』からの引用でこの説を補強している。これについては長くなるので後で検討しよう。

職人技の披露はこれくらいにして、それ以外にも、商業手形の割引から銀行信用へ、という銀行信用論とか、機能資本の循環過程での遊休貨幣資本の問題とか、ヒルファーディングの説は広く受け入れられている。

金融、金融市場、金融資本について

金融資本という用語は『資本論』にはなく、金融という用語も、稀にしか出てこない。索引では「金融貴族」という言葉がしかでてこない。飯田は「金融市場としての資本(マルクス)」(飯田、192頁)と引用個所の表示なしに引用しているが、これは資本論のプラン問題でよく引き合いに出される『経済学批判要綱』からの引用である。しかし、この引用は、マルクスはゲルトマーケット(貨幣市場)と書いているのを訳者が「金融市場」と意識していたものだ(『マルクス資本論草稿集』第1巻、大月書店、311頁)。だから金融資本の概念はヒルファーディングが規定したことになる。ヒルファーディングには、貨幣論での誤りがあり、マルクス主義の側からの金貨論の創始者であることはすでに指摘した。それについて振り返ることから始めよう。

ヒルファーディングの貨幣論

すでに書いたことでもあるので(『ASSB』23巻1号、「マルクス価値尺度論の再興」)まずは批判の視点を列記しておこう。

ヒルファーディングの貨幣論は、金融資本の分析のための導入として用意されていて、『資本論』の貨幣論を信用論展開の観点から組み替えている。その際に、諸商品の共同行為に注目しているが、それと商品所有者の共同行為を同一視している。しかし、諸商品は自らは動けないし、社会的象形文字として自己を表示するだけである。だから、商品所有者たちは、自己の商品に自分の意志を宿し、単一の商品でそれぞれ自己の商品の価値を表現することで無意識のうちでの本能的共同行為を行い、その結果、貨幣が生成される。貨幣が生成されると、商品所有者たちの意識は、物象化による物神性に捉われて、貨幣に価値があるから諸商品が買えると考えて、自らの共同行為は意識にのぼらない。諸商品への価格付けが、貨幣生成の共同行為への参加であることは意識されない。ヒルファーディングは、諸商品の共同行為と商品所有者たちの共同行為を同一視しているので、この共同行為を意識されたものとみなしてしまい、国家による管理を展望している。その結果、価値尺度論が欠落している。このことは、諸商品の共同行為から貨幣の必然性を説くと、貨幣の価値尺度機能が規定できないことを示している。より詳しく検討しよう。

『金融資本論』第1章 貨幣の必然性、では、貨幣の必然性が、価値形態論からは説かれてはいない。計画経済との対比で、資本主義を交換から説き起こしている。交換→商品→労働時間→価値の表示、という順序だ。ただし、次のように商品たちの共同行為として貨幣を捉えている点は面白い。

「人間たちが共同して、彼らの仲間の一人に、彼らの名において特定の諸行為をなす資格を、認めるように、商品たちもまた、その名においてこの商品世界における市民権——完全市民権または不完全市民権——を受ける商品を彼らの側で認証するために、共同せねばならない。しかし、諸商品が共同しうる唯一の形態は、それらの交換である。なぜならば、社会主義社会における社会的意識にあたるものは、資本主義社会では市場における諸商品の社会的行為だからである。市民的世界の意識は、市価表に還元されている。ただ交

換の成就を通してのみ、個人は全体の法則を経験する。個人が交換に成功したときにのみ、彼は、社会的に必要なものを生産したという証明をもつ。ただそのときにのみ、彼は新たに生産を開始しうる。かように諸商品の共同行為によって、いっさいの他の商品の価値を表現する資格を認められている物、——これが貨幣である。商品交換そのものの発展とともに、この特別な商品の資格認証も同時に発展する。」(『金融資本論』国民文庫、上、25～6頁)

しかし、商品たちの共同行為と、商品所有者たちの共同行為とは異なる。諸商品の共同行為は、貨幣を生成するには至らず、ただ商品所有者にサインを送るだけである。サインを受けとめた商品所有者の共同行為は無意識のうちでの本能的共同行為であり、商品に意志支配されているのだがヒルファーディングはこのことをみていない。

次に、価値形態論の簡単な紹介があり、以下のように貨幣生成が説かれる。

「単純な価値表現、たとえば一枚の上着=20メートルの亜麻布 というような表現は、すでに一つの社会的関係を表現している。しかし、この関係は、ただ偶然的で個別的であってはならない。商品生産が社会的生産の一般的形態となるに至れば、無数の交換、したがって無数の価値等式において、社会的物質代謝が、したがってまた労働する人々の社会的関連が、貫徹される。交換における諸商品の共同行為、これが、個人の私的な具体的な労働時間を、価値を形成する一般的な社会的に必要な抽象的な労働時間に、転化する。諸商品は、全面的に交換において相互に自分を計り合いながら、同時にますます頻繁に一つの商品において自分を計る。この一つの商品が貨幣となるためには、ただ習慣的に価値尺度として確定されさえすればよい。」(同書、26～7頁)

ヒルファーディングはこのように価値形態の発展をまとめているのだが、しかし価値形態の分析のなかに交換を持ち込んで、交換における諸商品の相互の社会的労働への転化と価値の相互の尺度しあい、ということから貨幣の生成を説いている。つまり交換過程における商品所有者の共同行為に先立って、交換における諸商品の共同行為を説いているのだ。価値形態論と交換過程論が合体され、諸商品の共同行為をキーワードに貨幣の生成が恣意的に述べられている。

「かくして、一般に社会的生産および再生産を可能にするためには、諸価値の交換が必要である。ただかようにしてのみ、私的諸労働は社会的に承認され、検量され、諸物相互の諸関係はそれらの生産者たちの社会的諸関係となる。したがって、交換がいかように行われようと、貨幣によって媒介されていようと、そうである。したがって、貨幣は、価値として、他の各商品と同じに商品である。そして、貨幣が価値をもつという必然性は、直接に商品生産社会の性格から生ずるのである。」(同書、27頁)

価値形態と交換過程とを合体させることは混乱であるが、どうやらこの混乱は、交換を諸価値の交換と見ているところから発しているようだ。商品交換で交換されるものは商品の使用価値で価値は交換されない。商品交換では価値は手放されない。商品交換を、使用価値の交換ではなく、価値の交換と見るならば、価値形態は価値の交換の形態ということになり、交換過程と合体させられてしまうだろう。また、貨幣が価値をもち、それが商品金の価値であるという説明も誤っている。貨幣としては金は価値尺度であり、貨幣自体は価値をもたない。

この後もヒルファーディングは、第2章 流通過程における貨幣、第3章 支払い手段としての貨幣。信用貨幣、第4章 産業資本の流通における貨幣、というように、延々と貨幣について述べているが、重要なポイントは、彼が、マルクス主義の側からの金貨論の先駆者であることで、これについては前掲『ASSB』論文を参照されたい。いちいちコメントしているときりがないので、ここで打ち切りたい。

次に、利子生み資本の原理的解明が欠落している点について考察しよう。

ヒルファーディングの資本信用（銀行信用）論

ヒルファーディングは商業信用から銀行信用へという発展過程を次のように描いている。

「しかし、手形の流通は、その支払い能力が確実であればあるほど、より広範囲でありうるであろう。流通手段および支払い手段として機能すべき手形の可信性は、周知されていなければならない。この機能も銀行のものとなる。銀行は、手形を買うことによって、この両機能を果たす。銀行業者が手形を買えば、彼は信用を与える者である。銀行業者は、商業信用に銀行信用——彼自身の信用——を代置する。手形と引換えに銀行券を与えることによって、産業手形および商業手形に彼自身の手形を代置する。なぜならば、銀行券は銀行業者引受の手形にほかならず、この手形は産業資本家や商人の手形よりもより好んで受取られるからである。したがって銀行券は手形流通を基礎とする。」(同書、126頁)

このようにヒルファーディングは、産業資本家が振り出した手形(何か月後の商品の販売後に貨幣を払うという約束証書)を受け取った債権者が、銀行で利子を割り引いて銀行券を即時に発券してもらい、手形を現金化する、これが銀行業者の中心的役割ととらえている。だから銀行券も次のように商業手形の代位として位置づけられている。

「かように銀行券は、元来は、生産的資本家の手形に代位する銀行の手形にほかならない。」(同書、126頁)

このように位置づけられた商業信用と銀行信用との関係において、銀行業の発展がもたらす事態についてヒルファーディングは次のように述べている。

「銀行業が発達して、すべての遊休貨幣が銀行に流入するようになるとともに、銀行信用が商業信用に代わる。すなわち、ますますすべての手形が、生産的資本家たちのあいだで流通することによって、その元来の形態で支払い手段として用いられることはなくなって、その転化された形態で銀行券として用いられるようになる、というふうにしてである。貸借の相殺と決済とがいまでは銀行で、また諸銀行相互間で、行われる。それは、可能な相殺の範囲を広げ、決済に必要な現金を一層減少させるところの、一つの技術的容易化である。

以前は生産的資本家たち自身が、自分たちの振出した手形の差額を生産するために保持せねばならなかった貨幣は、今では彼らにとって余計である。それは預金として銀行に流入し、銀行は今やそれをもって差額の決済を行いうる。したがって、生産資本家たちが貨幣資本の形態で保持せねばならなかった資本部分が減少する。」(同書、132～3頁)

商業手形に銀行券が代位することによって、産業資本家は貨幣の節約が可能となり、そしてこの節約された貨幣が銀行に集められ、それが手形割引による銀行券とは別の役割を銀行に与えるようになる、という筋道で銀行論が展開されていくのであるが、このヒルファーディングの商業信用(流通信用)から銀行信用(資本信用)へという提起は日本の信用論研究者の常識となっている。まずこの提起の成否について検討しよう。

この点についてまず、イギリスでは内国為替手形が中心だったという楊枝の異論がある。商業手形は、再生産に携わる資本家同士が生産物としての商品の賭け売の証書であるが、もともと外国との貿易に起源をもつ為替手形は銀行家や商人が引き受ける負債であり、それ自体銀行信用の範疇に属する。楊枝によれば、本来の外国為替手形が貿易と関係なく銀行家や商人の引受信用となり、それが内国為替の発展につながったという。そのためには預金を振り替えたり為替手形を割り引いたりする国際金融市場の発達が必要だった。アムステルダムで開発され、後にロンドンに移ることになる国際金融市場において、貨幣取扱業から生成した銀行は、産業資本家が産業革命を経て発達する前段階から、利子生み資本の管理について様々な手段を生みだしていた。預金の受け入れ、内国為替による支払い決済等(楊枝朗朗『近代初期イギリス金融革命』、ミネルヴァ書房)。よく言われていることだが、やはり、ヒルファーディングはイギリスについてではなく、遅れて発達したドイツの銀行についての分析として位置づけられなければならないだろう。つまり、イギリスでは商業手形を割り引くことで銀行信用が生成していたのではなく、最初から銀行信用が内国為替手形の振り出しによって生成されていたのであり、そして銀行家や商人は中世の貨幣取扱業から生成発展したものであった。だからマルクスは商業手形の割引に銀行信用への移行を見るような発想はなく、商業信用と銀行信用は同時並行の存在とみなしていた。

ところが、商業信用から銀行信用へという発想は、エンゲルス由来のものであり、『資本論』のそれを示唆する箇所は、マルクスの草稿の改ざんにもとづいていることは以前に指摘した。（『「資本論」の核心』、184 頁参照）

エンゲルスの発想を受け入れたヒルファーディングの資本信用論を見てみよう。ヒルファーディングは商業信用（流通信用）と銀行信用（資本信用）との相違について次のように述べている。

「しかし、流通信用そのものによっては、一生産資本家から他の生産資本家への貨幣資本の移転も行われず、他の（非生産的）諸階級の貨幣が資本家階級に流入してこの階級によって資本に転化されるということも起こらない。かくて流通信用は現金に代位するという機能を果たすものとすれば、他方、貨幣がいかなる形態にあるかを問わず、従って現金であると信用貨幣であるとを問わず、これを遊休貨幣から機能貨幣資本に転化するという機能における信用を、我々は資本信用と名づける。これを資本信用と呼ぶのは、この移転は、常に、生産的資本の諸要素を買うことによって貨幣を貨幣資本として充用する人々への移転だからである。」（『金融資本論』 国民文庫、上、125～6 頁）

「資本信用」は「流通信用」との対比で、単に貨幣の移転としてしか把握されていない。利子生み資本の原理的分析がなく、貨幣資本家と機能資本家との間の貨幣の貸借による資本の商品化のメカニズムの解明はない。これでは資本信用は機能的把握にとどまっているといわざるをえない。

実際に、ヒルファーディングは、流通信用は貨幣が支払い手段としての機能を持つことから発生することを指摘したうえで、それと資本信用との相違を次のように述べている。

「資本信用はそうではない。それは、ただ、所有者が資本として充用しえない一貨幣額の、これを資本として充用すべき誰かへの移転である。……したがって資本信用とは、移転によって遊休貨幣資本から機能資本に転化されるべき貨幣の移転である。資本信用は、支払信用のように流通費を節約するのではなく、同じ貨幣基盤の上で生産的資本の機能を拡張するのである。」（同書、137 頁）

このようにヒルファーディングは資本信用を貨幣の移転と把握している。ここから、産業資本の再生産過程で析出される遊休貨幣資本の融通と見ることになる。つまり次のような指摘である。

「資本信用の可能性は、ここでは貨幣資本の流通の諸条件から生ずる。すなわち、資本の個別的循環において周期的に貨幣が遊休させられるということから生ずる。」（同書 138 頁）

この遊休貨幣資本を「資金」と捉え、「資金」の融通はまた資本の商品化ではないといって、マルクスの利子生み資本論を批判したのが宇野弘蔵であった。宇野は資本の商品化を株式資本に認めるのだが、このような発想はヒルファーディングを起源としている。

ヒルファーディングの銀行論

では金融資本の主役である銀行はどのように位置づけられているだろうか。

「これまでに述べたところでは、銀行はまず第一に支払取引の媒介者として機能した。銀行は、諸支払の集中と地域的差異の調整とによって、支払取引を拡張する。次に銀行は、遊休貨幣資本の機能資本への転化を取計らった。銀行は貨幣資本を集め、集積し、分配し、かくすることによってこれを社会資本の循環に必要なそのつどの最小限に縮小した。

銀行はさらに第三の機能を引受ける、というのは、すべての他の階級の貨幣形態における収入を集めて、これを資本家階級に貨幣資本として用立てるのである。かくして資本家のもとには、銀行の管理する彼ら自身の貨幣資本のほか、すべての他の階級の遊休貨幣が流れてきて、生産的に使用されることになる。」（同書、141 頁）

ここで特徴的なことは銀行による信用創造について何ら触れられていない点だ。マルクスは銀行資本の特徴を、架空資本として位置づけているが、それは預金を受け入れてそれを貸付ける場合に、預金の額の 10 倍もの額が現実には貸付けられていることを指している。

このような視点がヒルファーディングには見られない。むしろ、銀行信用についても機能的な分析が中心であり、それゆえ商業信用との相違も、次のように機能的な面で捉えられているにすぎない。

「かような、商業信用からの銀行信用の相対的独立は、重要である。……信用の主要部分が商業信用で、銀行業者は主として手形商人であるにすぎなかったあいだは、そうではなかった。そこではむしろ銀行業者自身が事業の経過に、手形の支払いに、依存していた。」(同書、146頁)

銀行業者についてのこのような見方は歴史的事実に反している。手形商人といっても外国為替を取り扱う貨幣取扱業であり、商業手形の割引による銀行券の発券は貨幣取扱業務の一部でしかなかったのである。銀行券の発券は預金の貸付であり、商業手形の割引以外にさまざまな貸付の形態があった。

資本の二重化という錯誤

ヒルファーディングは株式への投資をする資本家も貨幣資本家として規定している。

「貨幣資本家はその資本を株式形態で投ずるばあいにも、やはり貨幣資本家の性格をもつ。」(同書、209頁)

ここでの貨幣資本家とは、機能資本家に対比して、貨幣を資本として投下する資本家のことだが、彼は株式への投資にもこの貨幣資本家の性格を見ようとしている。これは銀行によって所有されている株式を貨幣形態とみなし、それを金融資本と見る見方の基礎をなしている。ヒルファーディングの有名な金融資本の定義は次のようである。

「銀行はその資本のますます多くの部分を産業に固定せざるをえない。これによって銀行はますます多く産業資本家となる。このような仕方現実には産業資本に転化されている銀行資本したがって貨幣形態の資本を金融資本と、わたしは名づける。それは所有者たちにとってはつねに貨幣形態をたもっており、かれらはそれを貨幣資本、利子生み資本の形態で投下しているのであって、いつでも貨幣形態で回収することができる。」(『金融資本論』国民文庫、下、89頁)

この叙述が19世紀末から20世紀のアメリカの銀行には当てはまらないことはさておいて、産業に固定された資本は回収できないのに、なぜ資本の回収が可能と見ているかは、彼が、株式会社においては、資本が擬制資本(株式)と現実資本とに二重化すると見ているからである。長期の貸付をしながらも、株式の販売によって、貨幣資本を回収できるというわけである。ヒルファーディングはこのようにみることによって、産業に固定された貸付と、いつでも回収できる擬制資本を所有する銀行は産業資本家になっており、この産業資本家に転化した銀行資本、しかも貨幣形態の資本が金融資本だということになる。

飯田裕康は、資本の二重性論について次のように述べている。

「すなわち、資本集中の過程は、銀行信用の展開による貨幣市場の形成によって、より現実的基盤を与えられるが、株式は、こうした社会的に蓄積された貸付可能資本の投下対象として発行される。しかし、株式証券がいったん発行されると、それは擬制資本化され、本来の価値とはまったく異なる価格をもって独自の運動をするにいたるので、擬制資本を形成する資本還元のための基本的要因、すなわち、予想企業収益と市場利率とによって価格形成しうる場がなければならない。それが証券市場である。ここで、擬制資本たる証券は一個の商品(資本の商品化)となり、資本の二重化は完成する。かくて、個別資本に生産性の上昇、生産規模の拡張を強制する競争過程は、株式会社にあつては、株式の発行による擬制資本の創出と独自の運動、いかえれば証券市場における特異な価格形成とその変動による差益獲得のための株主間の競争を惹起せしめることによって、主としてその部面にかかわる株主層を広範に形成しつつ展開されざるをえないのである。」(飯田、250～1頁)

このような理解の根本は、擬制資本にも貸付と返済という利子生み資本の属性をそなえ

ているという把握にあり、しかも『資本論』にそのような叙述があることにもとづいている。『資本論』の関連部分をマルクスのノートと比較してみよう。まず現行版には次の叙述がある。

「それはちょうど積荷証券が積荷とは別に、また積荷と同時に、ある価値を与えられるようなものである。それは存在していない資本の名目的代表物になるのである。なぜならば、現実資本はそれとは別に存在していて、この複製品が持ち手を換えることによって、けっして持ち手を換えないからである。それは利子生み資本の形態になる。なぜならば、ただそれが或る収益を保証するからだけではなく、また売却によって資本価値としてのその返却を受けることもできるからである。」(『資本論』第3巻、原典、521頁)

この部分はエンゲルスによる変更は字句修正にとどまっている。証券の売買が利子生み資本の形態となる、ということの論拠として、証券自体が定期的収入をもたらすだけでなく、売却によって資本が返却される、という貸借関係を事実上認めうること、つまりマルクスにとって利子生み資本とは、定期的に利子をえる資本ということだけでなく貸付けと返却という貸借関係の形態をもつこととされている。

だからといって、株式の購入が貸付けであり、売却が返済であるというヒルファーディングや飯田の解釈はいただけない。貨幣資本家と機能資本家との間の貨幣の貸借という法的関係が売買に擬制されることで資本の商品化がという形態が成立することと、株の売買が、売買でなく、実は貸借関係であると見ることは、現象とその意味との関係において、ちょうど逆になっている。前者の場合は法的関係が本質であり、債務者は返済の義務を負うが、後者の貸付と返済という意味付けは法的関係ではなくて事実上の可能性にしかすぎないからだ。

引き続き現行版には次の叙述がある。

「国債も株式やその他の有価証券も、貸付可能な資本、すなわち利子を生むように予定されている資本の投下部面である。これらの諸有価証券は、この資本を貸し出す諸形態である。しかし、それらは、貸付資本そのものではなく、貸付資本がそれらに投下されているのである。」(同書、原典、522頁)

マルクスのノートでは次のようになっている

「国債も株式も、またその他各種の有価証券も、貸付け可能な資本にとっての、すなわち利子を生むものとなるべき予定されている資本にとっての投下部面である。国債や株式は、この資本を**貸し出すための(投下するための)**形態である。しかし国債も株式も、それらの形態で投下される貨幣資本ではない。他方、信用が再生産過程で直接的役割を演じるかぎりでは、産業家や商人が手形割引や貸付けを受けたいと思うとき、彼が必要とするものは、株式でも国債証券でもない。彼が欲するものは貨幣である。」(大谷、『経済志林』64巻4号、154頁)

エンゲルスはここでいくつかの修正をしている。まず「資本を貸し出すための(投下するための)形態である」の括弧内を削除している。次いで、貨幣資本(マニド Kapital)を貸付資本(Leinkapital)に変更している。エンゲルスはマルクスが多用しているマニド Kapitalについて、いろいろな単語に代えている。貨幣資本(ゲルト Kapital)、貸付け可能な貨幣資本、貸付資本など。

ここではエンゲルスの変更は改竄ともいえるべきものである。マルクスは、国債や株式といった擬制資本が利子生み資本の投下部面であり、資本を貸し出すための形態といったんは書いて、しかしかっこづけで「投下するための」という語句を挿入している。マルクスは、多分擬制資本への投下の場合には法的な貸借関係ではないことを知っており、事実上の貸借だということを知っていて、利子生み資本に擬制できるけれども、それは利子生み資本の投下部面で、出資であることを理解していたはずだ。だから、擬制資本は貨幣資本ではないと書いているのだが、エンゲルスは貨幣資本を貸付け資本に変更してしまったので、意味不明となってしまっている。エンゲルスの改竄がなければヒルファーディングも擬制資本を貨幣資本とみなし、資本の二重化を論じることをためらったのではなかろうか。